

# 月報

No.463  
2018年  
12月



日本キリスト教団  
茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目34-35  
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『 恵みと義の賜物とを豊かに受ける 』

(召天者記念礼拝)

ローマの信徒への手紙 5章12節～17節

小河信一 牧師

私たちの信仰の先達、その人々というのは、「恵みと義の賜物とを豊かに受けて」、天に召されていった方々であります。そして今、私たちは、「恵みと義の賜物とを豊かに受けて」、この世を歩んでいます。

神の言葉が皆さんの心に行き届くことを願って、最初に、説教の組み立てをお話し致します。

注目する節は、ローマの信徒への手紙 5:12 (初め)、5:15 (真ん中)、5:17 (終わり) です。それに伴いまして、着目する三つの鍵語は順に、罪、死、恵みとなります。

ローマの信徒への手紙 5:12——

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。

要約すれば、この節では、「罪がこの世の中に、奥深く・隅々まで入り込んで来た、と同時に、死が入り込み、すべての人の間に広まってしまった」と記されています。罪と死が束<sup>たば</sup>になって、人間に襲<sup>こわ</sup>いかかって来たというのは、恐ろしいことです。

元々が人間の罪によるのですから、安らかに人が死ぬというわけではありません。「罪によって」、人と人とが敵対し離反させられるような形で、人は死ぬようになった、ということです。

ここでパウロは、より説得的に議論を導くために、人類の祖、アダムの罪という具体例を引いています。

私たちは救われてはじめて、罪の怖<sup>こわ</sup>さを知ります。主イエス・キリストの福音に触れて、私たちは自分がいかに罪深い者であるか、悟らされるのです。パウロが、罪人が「義とされた」(ローマ 5:1,9) または「救われるであろう」(ローマ

5:9,10) と告知しながらも、しつこく罪や死のことを語るのは、そういう訳なのです。だからこそ、私たちは再び罪を犯さないように、神のとりなしを乞い願うものであります。

繰り返しますが、パウロの重々しい語調の、その内容は、「罪が世の中へ入り込んでしまった。人間は防御しようがなかった。人間の身心に根を下ろしてしまった。そして追い打ちをかけるかのように、死がすべての人に、くまなく駆け巡った。切り裂くように中へ入って来て、罪と死が全体に及んだ。敵対や分離の傷痕がそこかしこに残されている」と受け止められます。

アダムとエバは、善悪の木の実を食べて、罪を犯しました。それによって、アダムとエバに、すなわち、人間に死の力が及びました（参照：創世記 5:5 アダムの死）。そこで、人類最初の罪が描かれている場面を見てみましょう。

### 創世記 3:6——

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆そそのかしていた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。この一節に、人が罪を犯した様子が適確に捉えられています。

彼女にとって、木の実が「目の毒」ならぬ「目の欲望」になったと言います。目で見て、身心に欲望が広がった、つまり、貪欲どんよくがいたく彼女を刺激した、ということです。彼女に、それに抗あらがう力はありませんでした。ちなみに、この聖書の「欲望」（タアヴァー）という言葉は、現代ヘブライ語で「普通」の身近な用語になっています。「欲望」に、古代人・現代人に区別はないと言うことでしょうか。

ところで、その「欲望」がひそんでいることを別にすれば、「女が見ると、木（の実）はいかにもおいしそうで……」以下の部分に、犯罪に相当する動機や行為は無いようにも思われます。「おいしそうで……賢くなるように……女は取って食べ、……男にも渡した……彼も食べた」というのは、日常の食卓での出来事のようにも見えます。確かに一見、悪い事は何も犯してないようですが、しかし、エバとアダムは手を罪に染めています。

「それから、彼女は摘み取り、食らう。恐るべきことが、劇的な盛り上がりもなく、考えられる限り最も単純に描写される。それ故、人間の立場から見れば、まるで自明で内的に首尾一貫したことが起こったようにさえ見える。」

（フォン ラート）

それが常套手段であるかのように、罪はそうっと人間の心に忍び込み（参照：創世記 4:7）、人の抵抗する術なく、悪行を行わせるものなのです。そして、瞬またたく間に、罪は蔓延まんえんしていきます。そこには、目を引くようなドラマはありませんが、結果的に人は、しばしば大きな罪を犯しているのです。

そこに、そのように人を罪に駆り立てる「欲望」の怖さがあります。十戒の締めである第十戒には、人間の弱さやもろさを見据えたうえで、「隣人の家を欲しては

ならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」（出エジプト記 20:17）と命じられています。

創世記 3 章の場合、静々とエバが罪に手を染めたうえに、共犯者をつくり出してしまいました。

創世記 3:6——

女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

丁寧にも「一緒にいた男」、すなわち、一つの家庭を築いていた伴侶であることが言明されています。「その木の実を取ってはいけない」と、夫から妻への制止の声は上がらなかったようです。アダムは妻の悪行を黙認し、さらに自分でも実行しました。罪の頭<sup>かしら</sup>なるサタンは、親しい者<sup>よそお</sup>を装って、人を罪に巻き込むというのは、銘記すべきことです。

この点について C.ヴェスターマンは、「誘惑者（蛇）は、二人（アダムとエバ）をねらっていた。しかし、誘惑者にとって、女を誘惑するだけで充分であった。… … 理想的な人間の共同体などは、もとより存在しない」と述べています。愛の共同体が、共犯という形の罪によって、悪の共同体へと転落してしまいました。まさに罪が、この世を代表する家庭に侵入し、夫婦という基本の人間関係に亀裂を生じさせたのです。このままでは、たとえ肉体は朽ちずとも、霊的には「死んだ」状態に入り込んでしまったと言えましょう。言い換えれば、神の御力<sup>よ</sup>に拠らなければ、愛の共同体を築くことが難しいということが、人類最初の夫婦関係において告知されているのです。

主イエス・キリストが地上に現れるまで、罪が世の中に忍び込み、罪によって死がもたらされ、分断を呼び起こしながら世の隅々にまで及んでしまったという事態が改善されることはありませんでした。神はさまざまな預言者、王、僕<sup>しもべ</sup>などに油を注ぎ、遣わし、御心と御言葉を伝えられました。神と人また人と人との関係が本当の意味で修復されることはありませんでした。罪の問題は解決されませんでした。

今日のテキストの真ん中、ローマの信徒への手紙 5:15 を説き明かす前に、その前節の注目すべき句を読みましょう。二番目の鍵語である「死」について、一つの洞察が示されています。

ローマの信徒への手紙 5:14——

しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。

文脈的には、ローマの信徒への手紙 5:12 の「死はすべての人に及んだ」を受ける形で、「死は支配しました」が登場しています。やや唐突な感がするのは、「支配

する」、すなわち、「王となる / 王として治める」という語感の強さ・厳しさに拠ると思われます。

突然もし、不治の病<sup>やまい</sup>を告知されたとしたら、現代の医学をもってしても、「死なざるを得ない」となれば、大概の人は、心が死に「支配される」ことでありましょう。その当座おそらく、他に何も考えられなくなるでしょう。また、葬儀礼拝の当日、とりわけ火葬場において、私たちが「この方は完全に死なれたのだ」という現実<sup>よ</sup>に直面し、そのことを悲嘆のうちに確認させられます。まさしく「死は支配しました」ということです。

ところが、主なる神は、棺桶の重い蓋<sup>ふた</sup>を引き上げ、死の支配を打ち破ってくださいました。遺体の納められた墓の石をわきへ転がされました（マルコ 15:46-47、16:4）。端的に言えば、支配に関して、そこに逆転が起こったということが告知されています。アダムにおいて提示された罪と死の力は、イエス・キリストのあふれるばかりの恵みと義によってひっくり返されます。

ローマの信徒への手紙 5:15——

しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。

今、取り上げようとしているローマの信徒への手紙 5:15 以下においては、死の支配からの転換について、主イエス・キリストの御業、十字架と復活を土台としながら、信仰者はどのように変えられたのか、という点に光が当てられています。

15 節の冒頭の「恵みの賜物」は、ギリシャ語で「カリスマ」と言います。世に流布している「カリスマ」の用法では、或る特別な人物のみが「カリスマ」（超人間的な資質を持つ指導者）ということになりますが、それは、本来の聖書的な用法と異なります。上の節に証示されている通り、聖書信仰において、「カリスマ」は「多くの人に豊かに注がれ」ています。

コリントの信徒への手紙 一 12:9-10——

<sup>9</sup> またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物（カリスマタ / カリスマの複数形）、<sup>10</sup> またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。

（口語訳）

ここでパウロは、キリストの体を構成している人々がいろいろな賜物（カリスマ）を持っていると述べています。彼はコリント教会において、尊い一つひとつの賜物が絶妙に組み合わせられ、ゆき巡っているのを見ていたのでしょう。従って、私たちが「恵みの賜物」を分かち合うことにより、その働きはますます大きくなっていきます。

「多くの人に豊かに注がれる」というのは、洪水のように「満ちあふれる」という意味です。同じ章に、「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」（ローマ 5:5）と記されているように、「神の愛」のうちに無償で、「恵みの賜物」は私たちに与えられ続けています。

私たちは元来、アダムとエバのように、情けない罪人です。忍び寄って来た罪に抗<sup>あらが</sup>う術もなく、しばしば罪を犯してしまいます。何のドラマもない日常生活の中に、共犯者をつくり出してしまいます。しかし、神はそのような私たちを見捨てられませんでした。

神の遣<sup>つか</sup>われたイエス・キリストの「恵み」の業、すなわち、私たちの罪を赦し、神の愛を注いでくださった救いの御業……その尊い御子イエス・キリストのお働きが、私たちに及んで来る、私たちはそれに教化されるというのが、「恵みの賜物」（カリスマ）なのです。

ローマの信徒への手紙 5:17——

一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。

先に示唆した通り、ここで、支配の逆転が起こります。「死が支配するようになった」（ローマ 5:14,17）から「神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は支配するようになる」へと、その転換がはっきりと述べられています。繰り返しますが、ここでは、主イエス・キリストではなく、「神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人」の立ち位置が示されています。この文脈で、「支配するようになる」というのは、神ではなく、信仰者なのです。もちろん、「一人のイエス・キリストを通して」ですが……。

「神の恵み」と「義の賜物」とに通底するのは、神から人に「与えられた」というメッセージです。信仰が与えられた、義が与えられた、賜物が与えられた、しかも豊かに与えられている……そこで私たちが為すべき応答は、正しく「受ける」、感謝をもって「受け取る」ということです。受け取って、私たちの身心に充滿させるということです。

「神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は……生き、支配するようになる」と言います。主イエス・キリストに触れていただいた者は、本当に生きようになります。罪と死を乗り越えて生きようになります。

「支配する」……ここでは、主イエス・キリストが「支配する」と言っているのではなく、神からの恵みと義を受け取っている人が「支配する」（原意は「王となる」）と述べられています。これは驚くべきことです。

何を支配するのかと言えば、罪と死です。それらを、「イエス・キリストを通して」支配するのです。

考えてみれば、死には「支配する」がふさわしいのですが、信仰者が「支配する」というのは適切な表現でないようにも思われます。「支配」には、権威や抑圧というニュアンスが有るにもかかわらず、それをあえて用いたのは、もはや死の支配が打ち砕かれて、「イエス・キリストを通して」の支配が、主の十字架と復活において打ち建てられたからです。キリストを信じる者は、その支配下に置かれ、「小さな王」として日々に、罪の誘惑と死の恐れとに打ち勝つのです。

今私たちは先に天に召された兄弟姉妹のことを覚えております。それらの方々もひと度は、罪と死に支配された者でありました。そこで、私たちと同じように、悩み苦しまれたことでしょう。しかし、愛する兄弟姉妹は、「恵みと義の賜物とを豊かに受け」、罪深い者でありながらも、主イエス・キリストによって義とされる恵みにあずかられました。

天を仰ぎつつ、私たちは「恵みと義の賜物」を豊かに受け、そして分け合って、一週間の旅路を歩んでまいりましょう。

## ◇ わたしの信仰告白 ◇

小河 信一

11月25日の主日礼拝説教の中で、「わたしの信仰告白」を紹介いたしました。

ここに、その全文を掲載します。

これは、申命記8章3節ならびにマタイ福音書4章4節「人は神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」という句自体がすぐれた信仰告白になっている、それに倣って、わたしもまた信仰告白をする、という文脈で語ったものです。

わたしは、父なる神の口から出た神の言葉を信じます。

肉となってわたしのところに来てくださった主イエス・キリストを信じます。

主イエス・キリストご自身から、神の言葉、そして、神の御心を教えていただきます。

そのことによって、わたしは、本当に生かされます。生きます。生活します。

弱く罪深いわたしですから、いつも聖霊をわたしに注いでください。

『主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった』（創世記2章7節）という「命の息」によって、初めから終わりまでわたしを生かしてください。

神が授けてくださった「命の息」によって、わたしの口を潔め、讚美できますように導いてください。アーメン